前史

戦後、新憲法のもとで生活保護法、身体障害者福祉法など各種の福祉制度の整備がはかられましたが、障害者を取り巻く社会環境はなお厳しく、実生活上で多くの困難を余儀なくされていました。そんな中で1965(昭和40)年に起こった「蛇の目寿司事件」は社会に大きな衝撃を与え、この事件以降、聴覚障害者の人権の擁護をめざして運動が広がり、1970年(昭和45年)に東京で手話奉仕員養成事業、さらに３年後(1973年)には手話通訳設置事業がスタートしました。

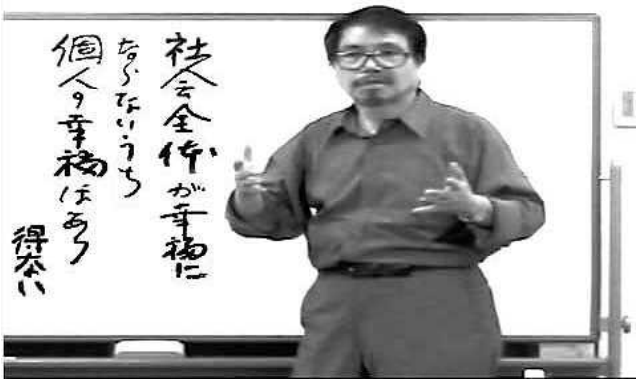
スタート

1974年(昭和49年)

渋谷手話の会の誕生

手話通訳養成・派遣事業が軌道に乗り始めると、1974年４月には渋谷区でも身体障害者福祉協会の定期総会に初めて手話通訳(佐々木喜代子氏)が付きました。定期総会の後、渋谷でも「手話通訳者を育てよう」という声がろう者から出て、５月に手話講習会設立準備集会が開かれました。その結果、６月に「渋谷手話を楽しむ会」(後の渋谷手話の会)が設立され、自主手話講習会として手話の学習が始まりました。

設立時の代表(会長)は鈴木登氏、主任講師は佐々木喜代子氏で、鈴木氏は、5年後の渋谷区聴覚障害者協会の設立にも尽力し、その初代会長に選ばれました。



設立当初、講習会は月に２回(土曜日)、渋谷区福祉事務所の職員が同席して、区役所の地下会議室で開かれていました。12月には最初のクリスマスパーティーが開かれ、28名が参加しました。

1975年（昭和50年）
初級・中級に分け、学習日を金曜日に変更

1975年になると、佐々木氏が多忙なため山田現会長が講師になり、他に数人がリーダー役を務めることになりました。３月からは初級・中級の２グループに分け、６月からは、学習日を金曜日に変更しました。

また、４月に渋谷区聴力障害者協会設立のための総会を開きましたが、設立は保留になりました。この時期、会運営のために会長に加え、木島京子、角田三郎、山田照子、村田の各氏が世話人になっています。

1976年（昭和51年）
「渋谷手話の会」に改称

３月まで会場が確保できず休会しましたが、４月から復活し、会の名称を「渋谷手話の会」に改めました。また、月２回の学習会を毎週開催してほしいという要望が出されましたが、会場の都合で月３回になりました。10月からは山田照子氏が中級、藤善氏が初級の指導担当になり、毎月１回初級・中級交流会を開くことが決まりました。

1977年（昭和52年）
東京都手話サークル連絡協議会へ加入

「渋谷手話を楽しむ会」が誕生した当時、東京で手話サークルと呼べるものは当会を含め７つとわずかでしたが、誕生から７年を経過した1977年（昭和52年）には、東京の手話サークルは約20に増え、２月に東京都手話サークル連絡協議会（都サ連）が誕生し、渋谷手話の会は５月に都サ連に加入しました。

1978年（昭和53年）
社会教育団体に認定される

発足から４年、渋谷区から、手話奉仕員養成のための社会教育団体と認定され、社会福祉協議会を通じて補助金が交付されるようになりました。当時、まだ渋谷区には、手話奉仕員を養成する手話講習会がなかったので、手話の会がそれに代わる役割を担うことになりました。

社会教育団体と認定されてから、いっそう手話の学習、普及に力を注ぎ、手話奉仕員養成で大きな役割を果たしてきました。1991（平成３）年に手話講習会が発足してからも、この伝統は受け継がれています。

1979年（昭和54年）
創立５周年記念の集い

渋谷手話の会誕生から５年目の1979年には大きな出来事がありました。まず６月には手話の会は創立５周年を迎え、７月に最初の創立記念の集いを開催しました。

８月には、渋谷区の聞こえない人にとって念願だった渋谷区聴覚障害者協会（渋聴協）が設立され、初代会長には、手話の会の代表者であった鈴木登氏が就任しました。10月からは、社会福祉協議会を通じて会場が確保できるようになり、月に３回だった例会（学習会）を毎週（金曜日）開くことが可能になりました。

1980年（昭和55年）
渋谷区民祭に初参加

４月に、鈴木会長が渋聴協に専念するため、山田照子会員が第２代の会長に就任しました。11月には初めて渋谷区の区民祭（ふるさと渋谷フェスティバル）に参加。この区民祭は、毎年11月３日を挟んで２日間、代々木公園で開かれ、20～30万人が訪れる大規模なイベントで、区民祭参加は、サークルにとってもっとも大きな行事となっています。12月には、渋聴協と共催でクリスマスパーティーを開きました。

1982年（昭和57年）
第31回全国ろうあ者大会渋谷で開催

４月27～30日、渋谷区で第31回全国ろうあ者大会が開かれました。NHKホールでの記念式典では、参加者約3100人を前に、挨拶に立った常陸宮様の通訳を山田会長が担当しました。

1980年代になって、手話講習会の役割を担った手話の会の学習の成果は徐々に現れ、手話通訳ができる人も増えてきました。その結果、成人式、区民祭、教養講座など区内の各種の催しの通訳を手話の会会員が引き受けるようになりました。

10年

1984年（昭和59年）
創立10周年記念の集い - 西山千氏講演

10月に手話の会創立10周年の記念の集いが開かれ、記念講演には、国際的にも非常に知名度の高かった同時通訳者の西山千氏を招聘し、「通訳術について」というテーマで講演していただきました。

渋聴協は創立５周年を迎え、９月に金沢・飛騨高山へ記念旅行を行いました。

1987年（昭和62年）
恵比寿サークル誕生／檜原村１泊研修

恵比寿社会教育館主催の手話ミニ講座が春と秋に各12回開かれ、講座終了後、社教館の担当者から自主グループ結成の提案がなされました。手話ミニ講座の講師、受講生を交えた話し合いの結果、12月に手話サークルを立ち上げ、渋谷手話の会昼の部として発足しました。

またこの年には、野外交流・学習の一環として初めて１泊研修会を実施しました。場所は、奥多摩の檜原村で、渋谷区の教育施設となったもとの小学校を利用しました。以後、１泊研修会は継続的に行われるようになりました。

1989年（平成元年）
例会会場を大向区民会館へ変更

これまでサークル活動は区役所の地下会議室で行ってきましたが、区主催の手話講習会がスタートするため３月で補助金が打ち切られたのを機に、4月から活動の場を大向区民会館に変更しました。

９月には渋聴協創立10周年記念大会が恵比寿区民会館で開催され、伊藤政雄氏が、「世界と日本・ろう者」というテーマで記念講演を行っています。

1991年（平成3年）
渋谷区手話講習会スタート

この年、念願の渋谷区手話講習会が発足しました。１年目としてまず初級の昼と夜のクラスが開講し、夜クラス講師は山田会長が務め、助手を手話の会会員が担当しました。

７月には、日本で初めて世界ろう者会議が開かれました。会期は約１週間、開会式は日本武道館、メイン会場は京王プラザホテルで、51か国、7000人が参加しまし

た。山田会長は分科会で通訳を担当、手話の会会員も通訳や要員ボランティアとして協力し、世界の聞こえない人や関係者と交流を深める貴重な機会となりました。

20年

1994年（平成6年）
創立20周年記念祝賀会

手話の会は、10月、創立20周年の祝賀会を原宿南国酒家で開催しました。

６月には渋聴協会員の河村恭行さん制作の江戸の復元模型がある江戸東京博物館を見学しました。

1995年（平成7年）
合同で野外交流会開催

３月に渋聴協会員で全国最高齢の岡沢久子さんが死去。後に自宅跡が東聴連に寄贈されました。10月には渋聴協と共催で、手話講習会受講生と手話の会、渋聴協の会員の交流を図るため野外交流会が開かれ、以後毎年実施されるようになりました。

1997年（平成9年）
渋谷区手話通訳派遣制度スタート

６月、渋谷区手話通訳派遣制度がスタートし、渋谷区における本格的な通訳派遣が始まりました。それにより、以後、手話の会は、公的派遣制度を補完する形で、成人式や区民祭など派遣制度対象外の通訳を受け持つことになりました。

1998年（平成10年）
自立支援センター完成

７月に東京聴覚障害者自立支援センターが渋谷にオープンしました。これは渋聴協会員だった岡沢久子さんの遺志で贈られた土地に建てられたものです。建設のため手話の会から

100万円以上を寄付しました。それを記念して大きなタイルが飾られています。

1999年（平成11年）
創立25周年記念の集い

９月に、恵比寿区民会館で創立25周年の記念の集いを開きました。記念講演は、早瀬（旧姓後藤）久美さんに依頼しました。早瀬さんは2001年の法改正により薬剤師免許を取得しました。またこの年に自立支援センターオープン１周年を記念して、７月に第１回センターまつりが開かれました。

2000年（平成12年）
幡ヶ谷サークル誕生

４月に幡ヶ谷サークルが誕生し、毎週土曜日例会を開くようになりました。

また、この年には、23区のトップを切って、渋谷区議会本会議に手話通訳がつき、以後、通訳は渋谷区登録手話通訳者の会が担っています。 議会通訳は、2022年からネット録画配信、24年からはリアルタイム配信されるようになりました。

2003年（平成15年）
第50回記念都大会、渋谷で開催

11月、渋谷公会堂で、東京都聴覚障害者第50回記念大会が、渋聴協主管により開催されました。これは渋谷で初めて開かれた都大会で、100名を超える会員が案内・受付・会場・保育などで全面的に協力しました。特に案内係は、渋谷駅頭に立ち、2000人を超える参加者の道案内の重責を果たしました。また、渋谷地域手話を渋聴協と検討・確定し、小冊子を1000部つくって都大会で配布しました。

30年

2004年（平成16年）
創立30周年記念大会

10月17日に創立30周年記念大会をリフレッシュ氷川で開催。第一部は式典、記念講演、アトラクション、第二部は祝賀パーティー。記念講演講師は、2004年４月か

ら国立大学法人となった筑波技術短期大学初代学長の大沼直紀教授、アトラクションでは、ろうの女性ダンスユニット「LO＋VE100％」や手話落語の笑草会が出演しました。記念大会参加者は総数156名、祝賀パーティー参加者は114名で、記念大会は成功裏に終了しました。

2009年（平成21年）
最後の檜原村研修

1990年代から2000年代に、渋谷区の檜原自然の家（もとの檜原村小学校）を利用した１泊２日の研修旅行を継続的に行い、この間、御岳渓谷、澤ノ井酒造、玉堂美術館、吉川英治記念館、払沢の滝など多摩の多くの名所を訪れました。檜原自然の家は老朽化のため2017年閉館となり、檜原村研修は2009年が最後となりました。

2011年（平成23年）
大向から美竹へ会場変更

大向区民会館の閉館が決まり、大向サークルの会場が、2011年４月から美竹の丘しぶやに変更になりました。しかし、３月11日に東日本大震災が起こって、美竹の丘しぶやの夜間使用ができなくなり、４月は休会、５月からは自立支援センターの会議室を借りて例会を開きました。ほぼ正常に戻ったのは７月になってからでした。

この年から、３サークル共催で、納涼会、Xmas交流会を土曜日の午後リフレッシュ氷川で開くようになりました。

2012年（平成24年）
復興支援区民祭

未曾有の大災害となった東日本大震災から1年半以上経過しても復旧は進まず、渋谷区でも復興に協力するために区民祭を復興支援と銘打って、被災地の郷土芸能などさまざまなイベントが企画されました。

この年から、納涼会、Xmas交流会は渋聴協との共催になりました。

2013年（平成25年）
たましろフェスタin 渋谷開催

10月、「たましろフェスタin 渋谷」がリフレッシュ氷川で開催され、手話の会は渋聴協と協力し、事前に講演会や説明会・学習会を開いて開催に備え、当日は、受付や会場設営、通訳、進行などを担当し、アトラクションとして手話コーラスを発表しました。

40年

2014年（平成28年）
手話の会創立40周

40周年を迎えましたが、未曾有の大災害となった東日本大震災からの復興はまだ先が見えない状況でしたので、記念行事は取りやめました。しかし、大震災があっても障害者福祉は徐々に進展し、障害者権利条約が批准され、また前年施行された障害者総合支援法にもとづき障害程度区分から障害支援区分への見直しが行われました。

2015年（平成27年）
NHK「みんなの手話」に出演

８月16日（日）放送の「NHKみんなの手話」の「手話サークルさんいらっしゃい！」のコーナーに、サークル会員14名が出演しました。サークルの歴史や活動などの紹介の後、キャスターをしていたデフパペットの善岡氏が出題した読み取り問題に挑戦しました。

2018年（平成30年）
渋聴協創立40周年祝賀会

渋谷区聴覚障害者協会は、10月６日、「パセラリゾーツグランデ渋谷」で創立40周年を祝いました。祝賀会には、長谷部渋谷区長をはじめ多くの方がお祝いに駆けつけました。手話の会も会員の一般参加に加え、通訳、受付、来賓接待などで協力し、祝賀会の成功に花を添えました。

2020年（令和２年）
コロナウイルス感染拡大とサークルの休会

世界で感染拡大していたコロナウイルスが、日本でも年初めから徐々に広がり始め、４月７日に全国に第１回緊急事態宣言が発出されました。公共施設の夜間使用ができなくなり、大向サークルは４月10日から、宣言解除（５月25日）後の６月12日まで休会しました。夏以降も感染は拡大し、結局、区民祭は中止、代わりにオンライン開催となり、手話の会は、例会や過去の区民祭参加の時のバザーや手話コーラス、開会式通訳などの写真とともに、活動内容などを記載した文書をアップしてオンライン参加となりました。

2021年（令和３年）
コロナウイルス感染拡大／手話言語条例制定

コロナウイルス感染は年が変わって一層拡大し、都内では緊急事態宣言が２回発出されるという厳しい状況でした（第２回が１月８日～３月21日、第３回が４月25日～６月20日、７月12日～９月30日）。公共施設の使用制限は、前年の第１回発出の時より緩和されましたが、美竹の丘しぶやの夜間使用禁止は継続し、大向サークルは長期の休会（１月８日～10月１日）を余儀なくされました。したがって納涼会は中止、区民祭も昨年につづいて代々木公園での開催は中止となりました。

こんな中でしたが、４月24日（土）、総合ケアコミュニティせせらぎで、幡ヶ谷サークル創立20周年の記念式典が開かれ、渋聴協の越川会長の挨拶に続いて、佐沢静枝氏の講演（「手話の魅力ー絵本読み聞かせ」）が行われました。

４月１日には渋谷区手話言語条例が施行されました。渋谷区では、2015年に、一人ひとりが自分を活かせる渋谷をめざして、「男女平等及び多様性を尊重する社会を推進する条例」（2024年「人権を尊重し差別をなくす社会を推進する条例」に改正）が制定されていましたので、その延長線上にある条例でした。コロナ禍の中の施行でしたが、それ以降、区の施策の検討会や住民説明会で手話通訳が多く設置されるようになりました。

2022年（令和4年）
区民祭再開

コロナウイルス感染は、2022年徐々に終息に向かい、社会活動も正常化し始めました。その結果、秋の区民祭は、小中学生によるパレードを中止し、舞台発表を少

なくするなど規模を縮小して代々木公園で開催されました。手話の会も、手話コーラスを見送り、テントでのバザーと指文字だけ行いました。

12月には「しぶや区ニュース」に、渋聴協の越川会長と山田会長の対談、「手話でのコミュニケーションをもっと広げたい」という内容の記事が掲載され、両会長のツーショットの写真が第一面を飾りました。

しぶや区ニュース
令和４年（2022年）
12月1日 No.1507
手話は聴覚障害者の意思疎通を支える言語

誰もが手話を使えるような社会へ

2023年（令和5年）
区民祭手話コーラス再開

コロナウイルス感染の影響がほぼなくなり、区民祭が小中学生のパレードを含めほぼ完全復活し、手話の会も３年ぶりに手話コーラスを行いました。

10月には、山田会長が、半世紀にわたる活動が評価され、令和５年度渋谷区区政功労者として、区議会議員などと共に表彰されました。

向かって前列右端が山田会長

50年

2024（令和6年）
手話の会創立50周年記念の集い

10月６日日曜日午後、記念の集いを美竹の丘しぶや多目的ホールで開催し、同時に記念のＴシャツと記念誌を制作し配布しました。記念の集いには渋谷区から区長、福祉部長も参列し、参加者は100名近くに上りました。